

児童図書室だより

🐱 よんでみませんか 児童図書室がえらんだ本 🐱

ものがたり
ちしきの本

No. 106(2019. 1)

きのこレストラン【幼児～小低】

新開 孝／写真・文
ポプラ社 2018.9 (J474-シ-1111560152)

赤い色のきのこ、タマゴダケがかさを広げると、柔らかいひだを食べに虫たちがやってきます。タマゴダケがくさりはじめると、ゼリーのようにやわらかくなり、栄養いっぱいきのこレストランに！レストランには、いろんな虫たちが集まってきました。切った木は、きのこの働きで朽ち木になります。朽ち木には、きのこを食べて生きているきのこむしがやってきます。森や草原で、命をつなぐ働きをするきのこを紹介する写真絵本です。

ぼくのジウウな字【小低】

春間 美幸／作 黒須 高嶺／絵
講談社 2018.9 (J913-ハル-1111566343)

ぼくの名前は鷹野龍彦(たかのたつひこ)。難しい漢字だらけ。テストで名前を書くのが面倒だったから、最初と最後の字を取って「タコ」って書いたら、母さんにおこられた。それで、書道教室に行かされることに…。教室の道子先生は、いいかげんに字を書くぼくに腹を立てたみたい。「とりゃあー！」というかけ声を上げると、背中に背負った大きな筆で、ぼくの右手に、ある「まじない」をかけたんだ。その日から、ぼくが書いた字が勝手に暴走しはじめた！

聴導犬こんちゃんがくれた勇氣

難病のパートナーを支えて【小中～小高】
高橋 うらら／著
岩崎書店 2018.10 (J369-勉-1111571218)

小型犬シーザーのこんちゃんは、飼い主が育てることができなくなったため、動物保護団体に連れてこられました。そこで、日本聴導犬協会の人目のとまり、聴導犬になるための訓練を受けることになりました。聴導犬とは、耳の不自由な人に、玄関チャイムの音や警報の音、電子レンジやタイマーの音など生活に必要な音を知らせて助ける犬です。聴導犬にふさわしい性質、訓練の様子、ユーザーの仁美さんとの生活をこんちゃんが語って教えてください。

いいたいことがあります!【小高】

魚住 直子／著 西村 ツチカ／絵
偕成社 2018.10 (J913-ウオ-1111564250)

小学6年生の陽菜子は、中学受験のため塾に通っていますが、お母さんに、家の手伝いもするように言われます。一方、お兄ちゃんは部活と勉強で忙しいからという理由で、家事をしていません。お母さんに対して納得できない気持ちをかかえていたとき、ある手帳を拾います。「親は、絶対に自分が正しいと思ってる…。」手帳には陽菜子と同じ気持ちが書かれていました。そして、不思議な女の子と出会います。ある日、お母さんに塾をさぼっていたことがばれてしまい…。

きっちり・しとーるさん【小低】

おの りえん／作・絵
こぐま社 2018.9 (J913-オノ-1111564222)

しとーるさんの朝は、いつもテキパキきっちり時間どおり。仕事場の図書館では、時々きっちりしていない人にイライラ。「はぁ」とため息をついて、まわりの人からこわがられてしまうこともあります。ある雪の夜、雪かきをしていたら、ノミだらけの汚れた子ねこに出会います。子ねこを家に連れ帰りますが、それからが大変！きっちりしていたしとーるさんの生活が、ちっともきっちりしなくなってしまう。

ソロモンの白いキツネ【小中～小高】

ジャッキー・モリス／著 千葉 茂樹／訳
あすなる書房 2018.10 (J933-モリ-1111576493)

アメリカ、シアトルの港に突然あらわれた一匹の白いキツネ。12歳の少年ソロモンは、学校になじめないでいる自分と、異郷に迷い込んでしまった白いキツネを心の中で重ねあわせて、キツネに近づこうとします。しかしある日、キツネは捕まってしまう。何とかしてキツネを故郷にかえしてあげたいソロモンは、父を説得して、キツネを連れて、自分の故郷でもあるアラスカに行くことに。心をとざした少年と、罪の意識にとらわれている不器用な父。白いキツネに導かれた二人が遠いアラスカの地でたどり着いた結末は…。

ふしぎなカビ オリゼー

千年の物語 和食をささえる微生物【小中～小高】
竹内 早希子／著
岩崎書店 2018.10 (J588-タケ-1111576475)

微生物「オリゼー」は、みそ、しょうゆなど、日本食の基本となる調味料を作り出すのに必要なカビの一種で、日本人の日常に寄り添い続けてきました。そんなオリゼーを育てる仕事をしている人たちを、種麹屋(たねこうじや)さん、通称「もやしやさん」と言います。もやしやさんとみそ、しょうゆなどをつくる醸造業(じょうぞうぎょう)の人たちの関係やその仕事内容を見ることで、オリゼーと日本の伝統との深い関わりを知ることができます。

明日のランチはきみと【小高】

サラ・ウィークス／作 ギーター・ヴァラダラージャン／作
久保 陽子／訳
フレーベル館 2018.10 (J933-ウイ-1111574452)

インドから転校してきた自信家のラビは、アメリカの学校では、できない生徒とされています。一方、自信がなく消極的なジョーは、学校で唯一の楽しみがランチ。ところが、食堂でお母さんが働くことになって、ランチの時間まで嫌いになってしまいます。だんだん学校が嫌いになり自信もなくなっていきふたりが、「自分を表すもの」という宿題に、何を提出するのでしょうか…。性格が正反対なふたりの少年の最低と最高が詰まった1週間の物語。

